

出産準備教室（パパママ教室）における歯科健診を通しての一考察 ～ 妊婦の口腔衛生状況が子どもの歯に与える影響について～

北吉こずえ 櫛山実寿 内田三代子 岩尾明美 根井千代美
阿部亜紀 三樹紀理子 江口佳菜子 長友真弓
入船裕子 竹迫正明 末永誠一郎 瀧口俊一（宮崎市保健所）

要旨

本市で実施している出産準備教室（パパママ教室）において妊婦歯科健診が子どもの歯に与える影響を検討した結果、教室参加者の子どもにおいて3歳児健診の1人平均むし歯本数は未参加者の子どもに比べ有意に少なく、出産準備教室における妊婦への歯科保健指導は、子どもの口腔衛生に対する意識づけとなることが示唆された。しかし、教室参加者は約1割となっており更なる啓発が必要である。

はじめに

宮崎市では、「健康みやざき市民プラン」の中で、健康づくりの取り組みとして「歯と口の健康管理ができるまちづくり」を目指し、継続した歯と口の健康づくりを実践している。その一環として、出産準備教室では妊婦歯科健診を実施するとともに、妊娠中及び子どもへの口腔ケアの重要性を指導している。今回、妊婦の口腔衛生状況が子どもの歯に与える影響について分析を行ったので報告する。

対象と方法

1 分析対象

平成16年度に出産準備教室に参加した妊婦（以下「参加者」という。）とその子ども214名を対象とし、出産準備教室に参加していない妊婦（以下「未参加者」という。）の子ども214名を対照群として分析を行った。なお、宮崎市では出産準備教室、1歳6か月児健診、3歳児健診を同一の歯科医師が担当している。

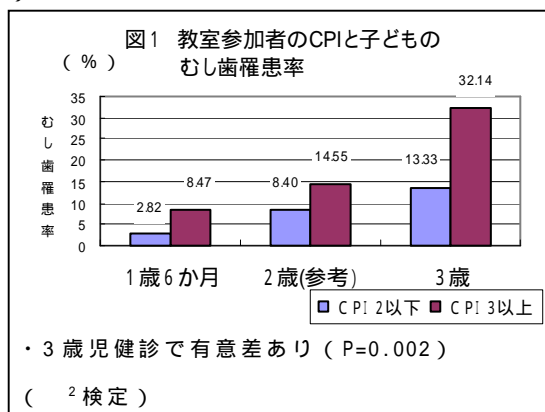
2 分析方法

- 1) 参加者のCPI（community periodontal index：地域歯周疾患指数）の結果と子どもの口腔衛生状況との関係。
- 2) 各健診（1歳6か月児、2歳児歯科、3歳児）時における参加者と未参加者の子どもの口腔衛生状況の比較。

結果

1 妊婦の口腔衛生状況と子どもの口腔衛生状況との関係

妊婦歯科健診において、CPIのコードが3以上（歯周疾患有り）であった妊婦の子どもは、



コードが2以下（歯周疾患無し）だった妊婦の子どもに比べ、3歳児健診時のむし歯罹患率が有意に高く（図1）、1人平均むし歯本数においても有意に多かった（図2）。なお、重回帰分析における3歳児健診での1人平均むし歯本数に影響を与える要因は、1歳6か月児・3歳児健診での清掃状況及び妊婦歯科健診における母親のCPIのコードが3以上であった。

2 参加者と未参加者の子どもの口腔衛生状況の比較

各健診（1歳6か月児、2歳児歯科、3歳児）において、むし歯罹患率・清掃状況ともに、大きな差は見られなかった。

1人平均むし歯本数（図3）では、3歳児健診において、参加者の子どもの方が有意に少なかった。なお、重回帰分析における3歳児健診での1人平均むし歯本数に影響を与える要因は、1歳6か月児・3歳児健診での清掃状況及び出産準備教室の参加であった。

考察

今回の結果より、母親の口腔衛生状況が、子どもの口腔衛生状況に影響を与えていることが分かった。また、参加者の子どもは、未参加者の子どもに比べ、3歳児健診での1人平均むし歯本数が少ないことから、出産準備教室における歯科健診・保健指導により、子どもの歯に対する意識が高まったと考えられる。そのため、出産準備教室における妊婦への歯科健診・保健指導は、子どもの口腔衛生に対する意識付けとなる有効な機会であり、今後も継続して実施する必要性が分かった。

また、出産準備教室の参加率は妊娠届出者の約1割となっており、未参加の妊婦の口腔ケアに対する意識づけをしていくことも重要である。そのため、親子（母子）健康手帳交付時に口腔ケアの重要性を啓発することはもとより、保健所における歯科相談（「歯とお口の健康相談」）の案内や、定期的な歯科健診勧奨などさらなる対策を行う必要がある。

おわりに

口腔内の健康は、全身の健康と密接に関係し、会話や食事を楽しみ、QOLを高める条件の一つである。乳幼児期から継続した口腔ケアを実践できる環境づくりを目指すために、出産準備教室をはじめ、あらゆる機会に口腔衛生に関する知識の普及・啓発に努めていきたい。

